

シュンギクにおける後作物残留リスク

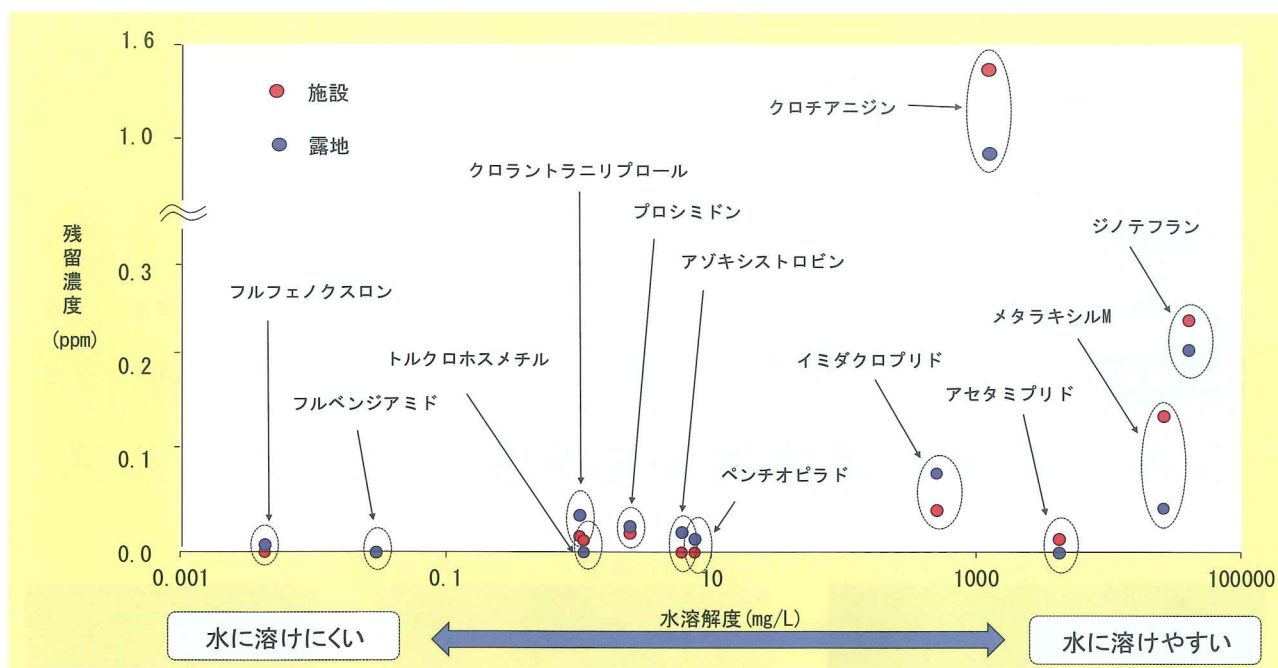


図1 農薬の水溶解度と残留濃度

注1) 農薬混合液(土壌中濃度設定値 2ppm)を 1L/m² 灌注処理し、手動耕うん機で耕起した後、播種した。
注2) 播種 48 日後の残留濃度を示す。

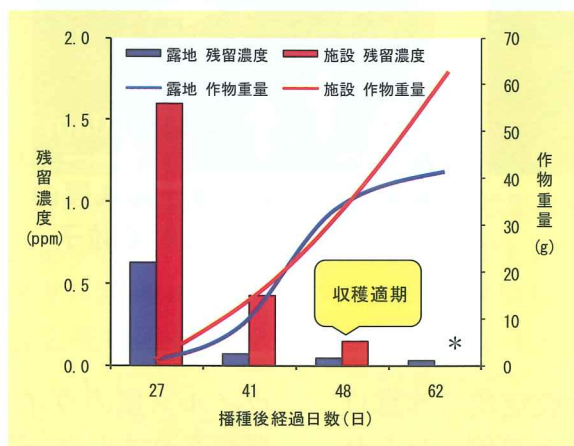


図2 メタラキシルMの残留濃度の推移

注1) 農薬希釈液(土壌中濃度設定値 2ppm)を 1L/m² 灌注処理し、手動耕うん機で耕起した後、播種した。
注2) ※: 定量限界値(0.01ppm)未滿

同じほ場で連続して作物を栽培すると、これまでに用いた農薬が土壌に残留し、後から植えた作物が吸収する場合があります。適正に農薬を使用している、想定外の農薬事故となる可能性があることから、このような後作物への残留リスクについて検討しました。

施設と露地の両ほ場に物性の異なる12農薬を灌注処理し、その後シュンギクを栽培して作物中の残留濃度を調査しました。

その結果、残留濃度は水に溶けやすい薬

剤で高くなる傾向がありました(図1)。また、これらの薬剤の残留濃度は、降雨の影響を受ける露地栽培より施設栽培で高く、作物体の重量が軽い生育初期に高くなる傾向でした(図2)。

このことから、後作物への残留リスクは、農薬成分の水溶解度、降雨および作物体の重量に左右されることが示唆されました。

今後は、栽培時期の違いによる残留リスクについて検討する予定です。

(農薬管理担当 山本彩 088-863-4915)